

1 手話通訳養成における通訳基礎トレーニングの重要性の増大と質的变化

学院手話通訳学科 市田泰弘 木村晴美 宮澤典子 野口岳史

通訳者に必要な能力として語学力と翻訳力が不可欠であることは言うまでもないが、それ以前に、「他者の話を理解する力」が前提となっていることはもっと強調されなければならない。なぜなら、「通訳者は自分が理解したことしか通訳できない」からである。当学科では学科開設以来、語学力（第二言語としての日本手話の能力）が十分に備わるまでの期間、通訳時に必要とされる語学力と翻訳力以外の能力をあらかじめ強化するために、「通訳基礎トレーニング」という科目を設定してきた。そもそも通訳教育においては、「いかに誤訳を防ぐか」ということが大きな課題となるが、誤訳の原因は多くの場合「語学力の不足」ではない。誤訳のおもな原因は「マルチタスク時の注意力の不足」であり、それは「各タスク単体の注意コストの軽減」と「マルチタスク時の注意力の適切な配分」によって解決されるものと考えられていた。したがって通訳基礎トレーニングもその二つの側面に焦点をあてていた。しかし、最近の学生の教育においては、そもそも「他者の話を理解できない」ために起こる誤訳が明らかに増加している。そのため、通訳の前提となる「他者の話を理解する力」を向上させることが最大の課題となり、通訳基礎トレーニングの内容は質的な変化を迫られ、その重要性も増大しているのである。

「他者の話を理解する」とはどういうことなのかについては、認知心理学の研究によって徐々に明らかにされつつある。いくつかの研究では、「他者の話がわかるとは、文脈（背景や状況）がスキーマ（ある事柄に対する既有知識）を発動することで部分の意味が引き出され、部分間の関連がつくことである」とされる。そこでは、文脈は与えられるだけでなく、スキーマ発動後の推論によって補強・修正もされる。たとえば、「サリーがアイロンをかけたので、シャツはしわくちゃだった」という文は、アイロンがけの効用といった「アイロンのスキーマ」だけでは解釈できず、「サリーはアイロンがけが下手な人なのだ」という推論による文脈の補強・修正があって初めて「無矛盾の解釈」が成立する。ただし、無矛盾の解釈を可能にする文脈はひとつとは限らない。「サリーは服飾デザイナーの卵なのだ」という推論もありうる。そして、文脈が異なれば、引き出される部分の意味も異なり、全体としての解釈も違ったものとなる。「他者の話を理解できない」という状況は、多くの場合、この推論がうまく機能しない時に起こる。推論は整合性があれば矛盾が生じない限り保持されうるが、それが正しい解釈であるとは限らない。また、不整合があればその解釈はただちに破棄されなければならない。さらに、無矛盾の解釈を可能にする複数の推論は、妥当性の点で対等ではない。妥当性とは「正しさ」ではなく、関連する手がかりを踏まえた上での整合性の度合いと確率論によって求められるべきものである。そのような複数の推論とその「妥当な」順位づけを可能にするためには「メタ認知」能力が欠かせない。また、「即時的な」推論の破棄と順位変更には「処理速度」も重要である。問題は、そのような能力が不十分である学生に対して、どのようなトレーニングを提供すべきか、ということである。当学科ではこの課題に対して正面から向き合っているところである。